

酒田市文化資料館光丘文庫 第3回企画展示

両羽博物図譜～松森胤保が描いた世界～

【開催期間】 令和6年10月26日（土）～12月22日（日）

はじめに

『両羽博物図譜』は、鶴岡出身の松森胤保（^{まつもりたねやす}文政8/1825～明治25/1892）が明治時代に著わした、今でいう生き物図鑑と言えるものです。合計59冊にも上る手描きの図譜は、庄内地方の動植物を中心としており、胤保のライフワークの集大成として最晩年まで執筆が続けられました。全7部構成で、『両羽獣類図譜』『両羽禽類図譜』『両羽爬虫図譜』『両羽魚類図譜』『両羽貝螺図譜』『両羽飛虫図譜』『両羽植物図譜』から成っています。胤保は「万物一系理」という独特な分類方法で図を並べています。収集した動植物を体系化しようとした姿勢は、当時としては珍しいものでした。

昭和10（1935）年、財団法人光丘文庫への東宮殿下台臨十周年記念図書の一部として、『両羽博物図譜』が光丘文庫の蔵書となりました。昭和28（1953）年に山形県指定有形文化財（典籍）に指定されています。

松森胤保（まつもり たねやす）

胤保は、庄内藩士長坂家の長子として鶴岡に生まれました。青年期には藩校致道館^{ちどうかん}で学び、32歳で助教となりました。文久3（1863）年に庄内藩の支藩・松山藩の付家老^{つけがろう}となり一家で松山に移り住みました。慶応3（1867）年、江戸薩摩藩邸焼き討ちでは松山藩兵の指揮を取り、翌年の戊辰戦争では松山藩軍務総裁や庄内藩参謀として各地を転戦し活躍しました。松山藩主から松山を守ってくれたという意味の「松守」^{まつもり}の姓を賜りましたが、「守」の字は遠慮して「松森」と名乗ったと伝えられています。明治維新以降には松嶺区長^{まつみね}、旧藩校里仁館^{りじんかん}惣官兼大教授、山形県会議員を務めるなど、政治や教育の場でも活躍しました。



松森胤保 肖像写真
〔明治24（1891）年12月3日撮影〕
胤保66歳のときの写真。
自身が発明した「網結器械」を持つ。



胤保着用の陣羽織

このような活躍の一方で、動植物・鉱物・化石・石器・土器を集めるなど様々な分野に対する興味を持っていました。幼少期に小鳥を飼ったことがきっかけで鳥類には特に夢中になりました。61歳で全ての公職を辞めてからは、さまざまな研究や著作に没頭し、動植物学、物理学（窮理学^{きゅうりがく}）、発明工学（開物学^{かいぶつがく}）、考古学などの著作が残されています。



胤保愛用の絵道具箱



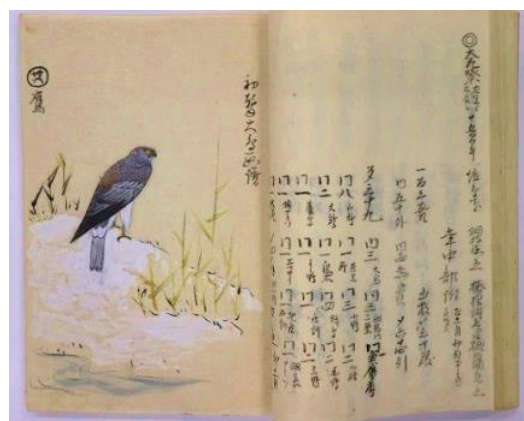
胤保愛用の絵道具

『両羽博物図譜』の先行著作

『両羽博物図譜』は、胤保が遅くとも明治16(1883)年、59歳頃までには取り組み始め、生涯最後の約10年をかけた自身の集大成となる著作です。この図譜には元となった先行著作がいくつも存在し、その成立過程がうかがえる貴重な資料といえます。その一部を紹介します。

『銃獵誌』（個人蔵）

慶応元(1865)年に付家老となった胤保は、藩主に銃獵の許可を願い出ます。同年6月11日に付家老の特権として許可が下り、15日には初獵に出てカラスを仕留めています。銃による鳥類の狩猟記録がこの『銃獵誌』です。どのように獲物を狙い、獲物のどこに弾が当たりどこから弾が出たか、など詳細に記録されています。池や家屋などの背景が描かれている点は他の図譜にはない特徴です。この著作から『両羽禽類図譜』へ多くの図が描き写され、また切り貼りもされています。



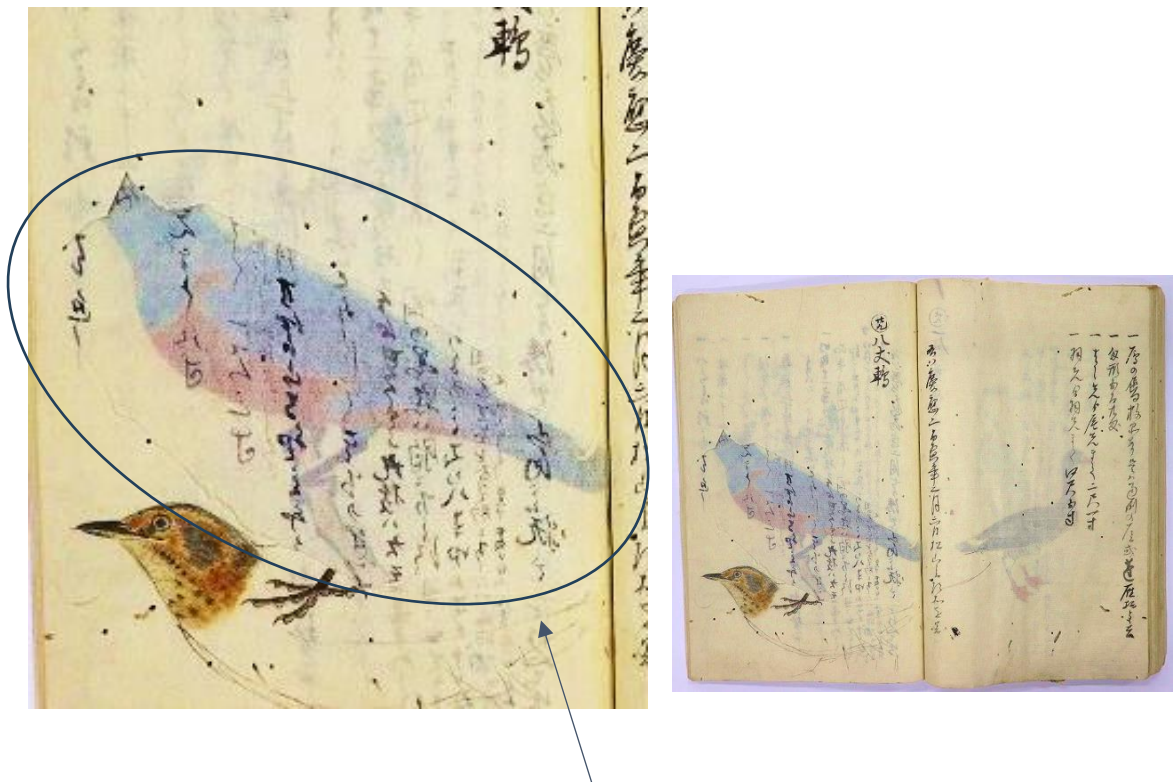
『銃獵誌』全4冊（慶応1/1865～明治16/1883）

『大泉諸鳥写真画譜』（個人蔵）

庄内地方の鳥を網羅しようという構想のもと、少年時代から書き溜めていた図を貼付し、新しく得た鳥は入手順に描き、観察記事や説明、写真（写生の意）を加えた画譜です。本編と附録があり、本編は庄内地方の鳥について記録されていますが、附録は庄内地方産以外の鳥を対象としており東京や横浜の鳥屋で見かけた鳥などが記録されています。こちらも『銃獵誌』と同じように『両羽禽類図譜』へ多くの図が描き写され、また切り貼りもされています。



『大泉諸鳥写真画譜』全6冊（慶応2/1866～明治17/1884）

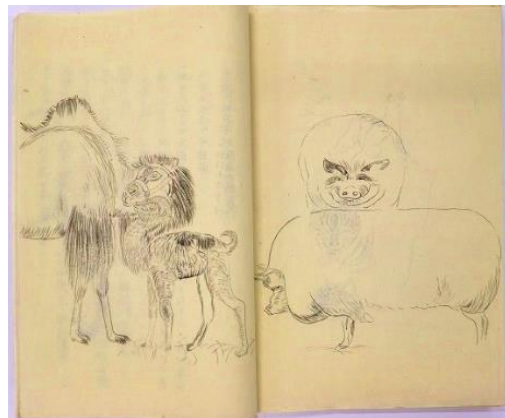
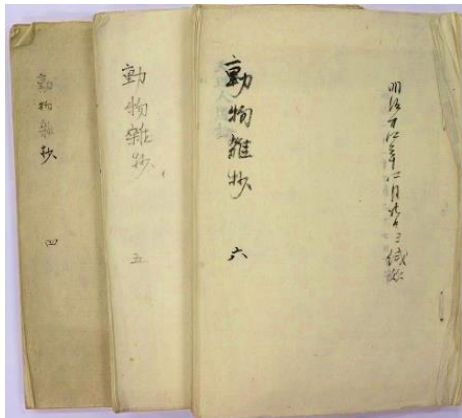


図が切り抜かれたページ。次のページが透けて見えます。

『動物雑抄』（個人蔵）

胤保が自分用に書いた動物学関係の備忘録です。鶴岡や松山に見世物としてやってきたヒョウやゾウ、ダチョウなどのことも書き留められており興味深い内容です。

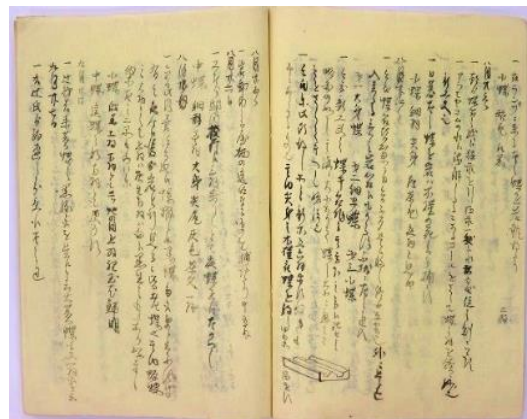
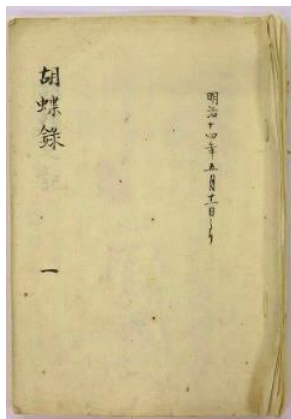
明治 6（1873）年刊行のモールス述・石川千代松訳『動物進化論』をはじめ、明治期に胤保が読んでいた書物から欧米の生物学についても知識を有していたものと窺い知ることができます。この著作の中にある胚の図や山犬の図は、『両羽獣類図譜』へ描き写されています。



『動物雑抄』全 6 冊のうち 3 冊（明治 11/1878～明治 25/1892）

『胡蝶録』（個人蔵）

胤保が 57 歳の時に、蝶を採集したことがきっかけで書き始めた日記です。採集した蝶のことや蝶採道具、方法なども詳細に書かれています。これとは別に『胡蝶図譜』もつくり図を描いていましたが、これは現存しません。『胡蝶図譜』からは『両羽飛虫図譜』蝶部へ図が描き写され、また切り貼りもされています。



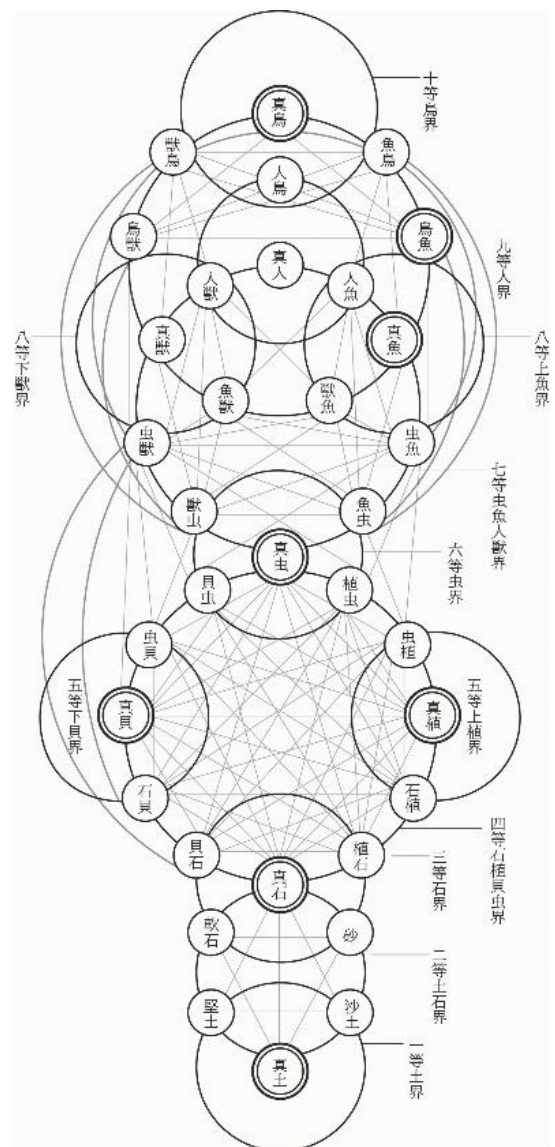
『胡蝶録』全 1 冊（明治 14/1881～明治 16/1883）

『両羽博物図譜』は和装袋綴の本で、美濃紙に筆で描かれています。下絵の状態のものがわずかにあるのを除いて、すべて岩絵具で彩色しています。内容ごとに『両羽獣類図譜』『両羽禽類図譜』『両羽爬虫図譜』『両羽魚類図譜』『両羽貝螺図譜』『両羽飛虫図譜』『両羽植物図譜』の7部に分かれており、それらを合わせて『両羽博物図譜』としています。

図は「万物一系理」（二種類の間には中間の存在があり、万物は連続した存在）という胤保の分類の考え方に基づいて並んでおり、図の注記は分類（●属▲類■種）、生き物の名称、図を描いた年月日を基本にしています。各図の名称は、当時の通称や胤保が命名したものもあるようです。さらに、生き物を見た経緯や場所、大きさや重さ、よく見られる季節、鳴き声などの特徴などを詳しく書いていたり、食べられるものについては味も書いていたりします。



←『両羽博物図譜』より



胤保考案の系統樹「動物系表」
『両羽獣類図譜』上巻より
(トレース図)

松森胤保の自然観 「万物一系理」

これまでの研究によると、胤保は、慶応初年頃に欧米の「自然の階段」（19世紀、生き物同士のつながりが一本の連続した鎖のようなものとする考え方）から「万物一系理」という考えに至ったと考えられるそうです。また、後にダーウィン（1809～1882/自然科学者）の進化論に触れ、「進化」という見方が胤保の自然観に加わったと推測されています。『両羽獣類図譜 論説』には、胤保の自然観にもとづく系統樹「動物系表」が3例記されています。

『両羽獣類図譜』

『両羽獣類図譜』は上下巻で、60点の図が描かれています。上巻は胤保の系統論や分類方式を記した文章を中心とする内容になっており、下巻では今でいう哺乳類を分類し、図とともに記述しています。現在では絶滅したニホンオオカミやニホンカワウソ、ニホンアシカの図が含まれています。

『獣類図譜』上巻には、『両羽博物図譜』全体の序文が記述される予定だったと思いますが、そのページは空白となっています。



両羽獣類図譜 動物分類（モモンガ）



両羽獣類図譜 動物分類（リス）

『両羽禽類図譜』

『禽類図譜』は全14冊、691点の図が描かれています。最初の2冊が総説、ほか12冊が図譜です。全9章ある「総説」には、鳥の捕まえ方「鳥獵法略」、鳥の飼い方「鳥養法略」、鳥を剥製にする方法「鳥蔵法略」などがあります。『両羽博物図譜』のなかで最も優れた仕上がりの図譜といわれており、鳥を好んだ松森の観察眼によって、鳥の特徴が非常に的確にとらえられています。

図譜の各部には、それぞれを代表する鳥の名前がついており、「鷹鷲部^{ようせん}」はタカ・ハヤブサ、「鶉鴒部」はツグミやムクドリ、といったようになっています。

図はもっとも古いもので天保12（1841）年のものがあり、松森が亡くなる3か月前の明治25（1892）年1月までの日付が確認できます。



両羽禽類図譜 鷹鷲部中（ヨタカ）

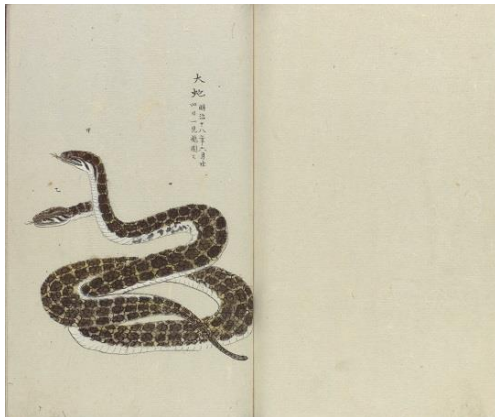


両羽禽類図譜 鶉鴒部上（オシドリ）

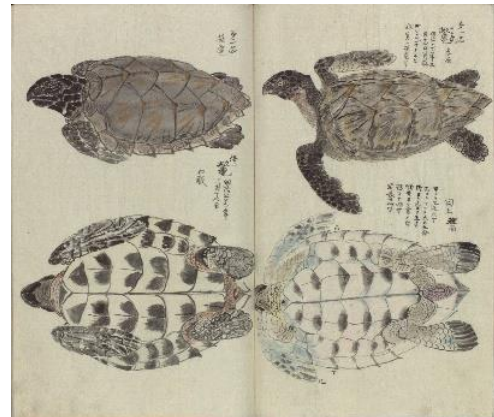
『両羽爬虫図譜』

『両羽爬虫図譜』は1冊のみで、カメやトカゲ、ヘビ、カエルなど35点の図が描かれています。カメについての記録が詳しく、生態や飼育方法などの解説があります。トカゲやヘビについても簡潔な解説がありますが、その他のカエル等については図がそう多くはなく、注記もまばらです。

また、見せ物で見た外国産の大トカゲや大蛇などの珍しい生き物も記録しています。



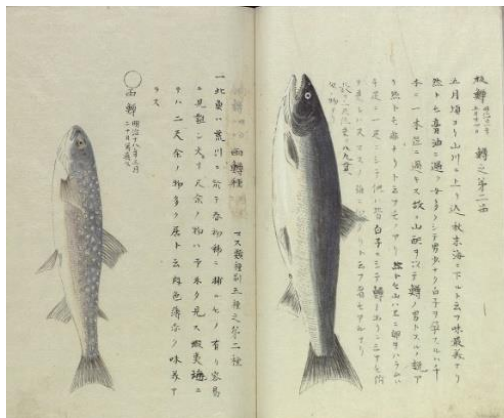
両羽爬虫図譜（大蛇）



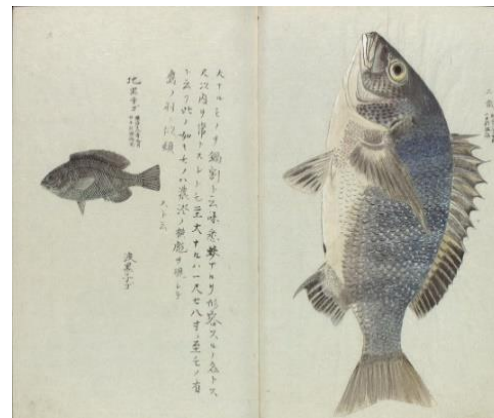
両羽爬虫図譜（ササガメ）

『両羽魚類図譜』

『両羽魚類図譜』は全4冊で243点の図が描かれており、「海魚部」と「川魚部」に分かれています。「海魚部」巻3の序文によると、『両羽博物図譜』の製作にあたって、魚類の調査については「年、已に六十に及びて始めて、其の搜索に着手す」と書いています。妥協無く、実物に接して図譜を製作しようとしていたことがわかります。



両羽魚類図譜 川魚部（板鱒、雨鱒）



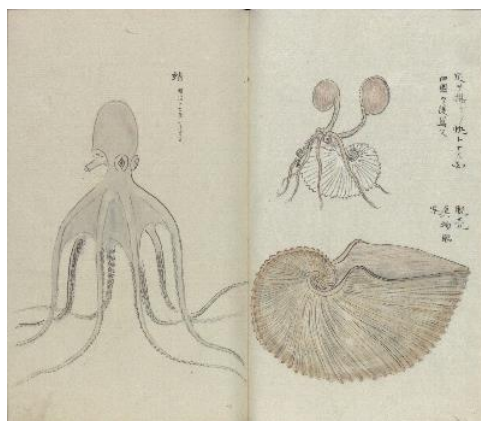
両羽魚類図譜 海魚部二（黒鯛）

『両羽貝螺図譜』

『両羽貝螺図譜』は全2冊で435点の図が描かれています。上巻の「真貝螺部」には海の貝類、下巻の「貝螺変部」には淡水の貝類やエビ・カニなどの甲殻類、タコ・イカなどの頭足類等がまとめられています。胤保の先行著作『家蔵五玩雑録』から写したもののや、洋書から写した図が含まれています。



両羽貝螺図譜
真貝螺部

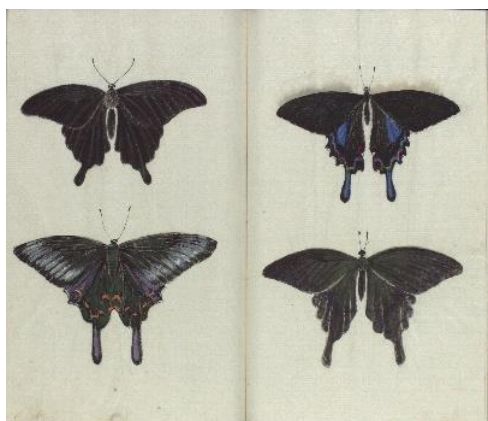


両羽貝螺図譜
貝螺変部（葵貝、タコ）

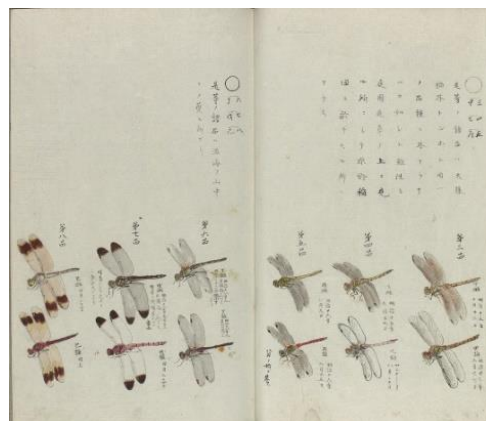
『両羽飛虫図譜』

『飛虫図譜』は全8巻で、652点の図が描かれています。「飛虫（とびむし）」は松森の造語で、「三体六足四羽」の動物、つまり現在の「昆虫」のことです。

巻1～3はニホンミツバチについての内容で、巻1には養蜂法や松森が実際に飼育した際の日誌があります。また、巻5～6の「蝶部」上下巻は先にまとめられていた胤保の著作『胡蝶録』と『胡蝶図譜』をもとにして編集されたものです。「蝶部下」の図譜に、蝶56点、蛾126点、幼虫とサナギなど55点の合計237点の図があります。このほか、「蟬部」や「蜻蛉部」の記録もまたよく整理され、優れた図が描かれています。



両羽飛虫図譜
蝶部下（クロアゲハなど）



両羽飛虫図譜
蝶部下（赤トンボ）

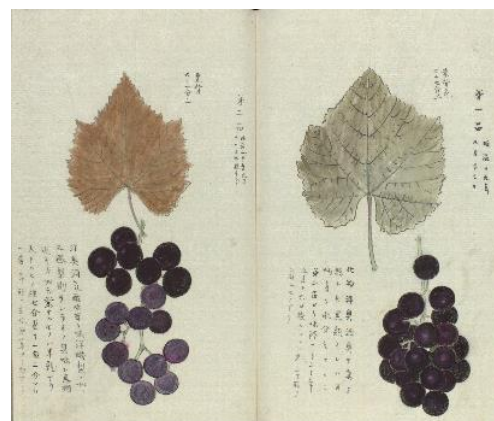
『両羽植物図譜』

『両羽博物図譜』の中でも最も巻数が多く、全 28 冊あり、2,872 点の図が描かれています。総説 1 冊の他は図譜となっていますが、動物の場合と比べて整理や分類が詳しくなく、概説や注記も少ない巻があります。『植物図譜』に取り掛かる矢先に胤保が倒れたことが関係しているのでしょう。

胤保が自ら育てたものを含む園芸植物や農作物、果物が豊富に描かれています。花の美しさや、果実の味の感想なども注記に含まれています。



両羽植物図譜 肉果部上(桜)



両羽植物図譜 瓜部(洋種の葡萄)

多くの注目を集め続ける『両羽博物図譜』

大正時代から現代にかけて、『両羽博物図譜』は多くの研究者の注目を集め、調査されてきました。近年では、慶應義塾大学の磯野直秀名誉教授(1936-2012/博物学史)らによって、松森胤保の博物学歴の研究や、分類方法の分析、『禽類図譜』に描かれている鳥類の同定など、詳しい調査が行われました。同時期に、酒田市内の有志が「両羽博物図譜刊行会」を立ち上げ、『禽類図譜』14巻と『補遺』(「銃獵誌」「遊覧記」「獸類図譜 論説」を収録)2巻の複製版を発行しました。

両羽博物図譜の世界 <https://miraini-sakata.jp/sakata-lib/matumori/index.html>

酒田市立図書館が慶應義塾大学 HUMI プロジェクトの協力を得て、
全 59 冊をデジタル化し公開しているホームページです。ぜひご覧ください。

【主な参考文献】

- 磯野直秀 「松森胤保と進化論」慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 No.3 1987 年
- 磯野直秀 『鳥獣虫魚譜 - 「両羽博物図譜」の世界 -』 八坂書房 1988 年
- 志田正市 『郷土の偉才 松森胤保』 松森胤保翁顕彰会 1989 年
- 松山町 『松山町史 下巻』 松山町 1989 年
- 磯野直秀 『「両羽博物図譜」の研究-1 松森胤保の博物学関係著作-』 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 No.6 1989 年
- 磯野直秀 『「両羽博物図譜」の研究-2 成立までの経緯と各部の概要-』 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 No.6 1989 年
- 磯野直秀 『「胡蝶録」-日本最古の蝶類採集日誌-』 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 No.6 1989 年
- 磯野直秀・内田康夫 『「両羽博物図譜」の研究-4 『銃獵誌』から『両羽禽類図譜』へ-』 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 No.8 1990 年
- 磯野直秀 「松森胤保」『彩色 江戸博物学集成』 平凡社 1994 年